＜北海道熊研究会報＞　第44号　2014年　12月　25日

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。　この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

＜北海道新聞の夕刊紙面、「私のなかの歴史」、「ヒグマ研究４５年」連載の12回目(8月30日)です。編集委員の「中尾　吉清」さんが取材文章化＞

3　6版　2014年(平成26年)8月30

私のなかの歴史

ヒグマ研究45年 ⑫

動物学者

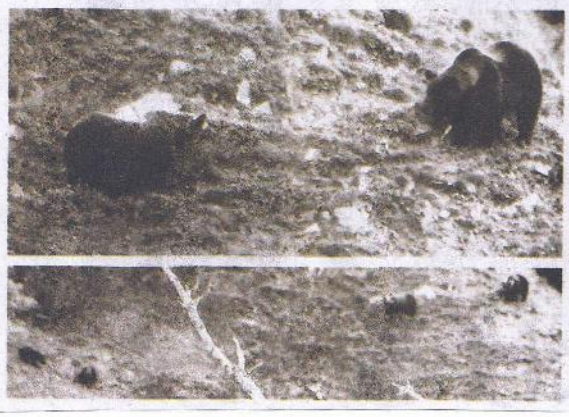
門崎(かどさき)　允昭(まさあき)さん

2005年、知床は世界遺産に登録されました。「これで、知床ではクマやシカが殺されることはなくなる」。私はとても期待したものです。

その期待は裏切られました。今でも世界遺産地域も含め斜里（オホーツク管内）、羅臼（根室管内）でクマの駆除が続けられています。許されるのでしょうか。

知床半島では8～11月、河口に数時間いれば、母子や単独のクマが必ず現れてマスやサケを捕まえて食べる。幕末の探検家、松浦武四郎が道内各地で目撃したクマの生態が今も見られる所です。

母子グマは雄を恐れるものです



雄への母グマの対応。写真上は、雄（右端）に近づく母グマ。写真下では母グマは子グマの元に戻る

知床半島　観察適地 駆除より予防を

が、ある時、母グマが子を残して単独で3㍍まで雄に接近した。2頭は無言で見つめ合っていたが、やがて雄が目をそらした。すると母グマは子グマの所に戻り、草を食べ始め、雄はそれを離れて見ていました。

近づいて見つめ合うのが、クマの仁義というか礼儀で、雄が顔をそむけたのが了解、というOKサインなのでしょう。知床は、そんな生態を観察できる所です。

「興奮させるので、クマに合ったら大声を出してはいけない」などと言われますね。知床の19号番屋の大瀬初三郎社長は、日本で一番多くクマに遭遇している人です。彼は「コラッ」と大声でしかりつけて退散させています。

知床では魚道がなくサケ、マスが遡上（そじょう）できない砂防ダムがたくさんあります。撤去するか、V字の切り込みを入れるなど遡上できるよう改良してほしい。

知床で出没を繰り返すクマを箱わなで捕獲し、おりを棒でガンガンたたくなどしておびえさせた後に山に返す「学習放獣」が行われたが、そのクマは出没を繰り返し、ついに射殺された。

学習放獣は広島県で始まりました。箱わなにかかったツキノワグマにトウガラシ成分のスプレーを浴びせる。目や喉にひどい苦痛を味わっても、再び出てくることもある。その理由、目的を調べ解決策を探るのが大事で、「お仕置き」で済むのではありません。

生態調査としてクマ、シカの首に重たい発信器を装着させていますが、動物虐待です。その成果を住民に還元できているでしょうか。

もちろん、何も対策をしなくていい、などとは考えていません。知床半島の斜里側はそうでもないですが、羅臼側には人家に山が迫りクマとの「すみ分け」があいまいな場所があります。

人里近くのクマによる人身事故は1964年、日高管内で起きて以降ゼロと言いました。しかし、羅臼側では、再びあり得ない、とは断言できない。「すみ分け」を確実にすることが必要です。

そうした場所では人家の山側に左右150㍍ずつ、計300㍍の有刺鉄線を張るのがいい。電気柵は草や枝が接触しただけで漏電し効果がなくなります。有刺鉄線の方が、効果は確実です。

子供の通学路は、安全のために山側にずっと有刺鉄線を延ばすべきでしょう。クマは川伝いに歩き、橋の下を通って海岸に出るので、クマの通行の支障にはなりません。

（聞き手・中尾吉清）